

ボランティア学習東京フォーラム 2018 報告書

ワークキャンプの研究 ～若者たちがみつめたリアルな真実～

日時：2018年12月1日 13:30～16:30

場所：昭和女子大学

主催：昭和女子大学 CSL センター

日本ボランティア学習協会

NPO 法人 good!

参加者 約 80 名

プログラム

【セッション I】実践レポート「若者たちがワークキャンプでみたリアルな真実」

パネリスト 橋本 紗希（昭和女子大学福祉社会学科）「女川ワークキャンプ」

吉田 奈央（昭和女子大学福祉社会学科）「伊那ワークキャンプ」

加藤 結実（昭和女子大学日本語に本文学科）

「タイ・チェンライ風の学校」

須貝 木之果（武蔵大学経済学部）

佐々木 勇蔵（千葉大学教育学スポーツ科学課程）

「スリランカワークキャンプ（good! 主催）」

コーディネーター 仲山 友（good!）

内容 ワークキャンプとは…特定の地域での合宿型ボランティアである。

4人の学生のワークキャンプの体験を通じて学び、考えた「リアルな真実」を語ってもらう

橋本 紗希（昭和女子大学福祉社会学科）「女川ワークキャンプ」

- ・今年9月4泊5日で実施。
- ・活動内容は清掃活動や保育園・子育て支援センター・障害者施設でのボランティア活動、女川つながると旅館や女川向学館の見学や体験談を聞く、ランタンづくり（緑日とランタン点灯）、お宅訪問、桜守の会ボランティア、ジュニアリーダーとの交流、高台見学、獅子振り体験、各地での交流
- ・印象に残った活動は「紙ランタン作り」「わ」～未来への前進～（復興の輪・笑う復興支援のランタン作りを事前学習で準備し、点灯した灯火を未来の証として活動の継続を意識づける意義がある。
- ・やることなく、充実感に乏しかった自分の日常を変える体験
- ・これからやってみたいワークキャンプは「空白のワークキャンプ」予定を決めず

何の先入観もなく、興味がなかったことに挑戦できるようなキャンプがあれば、これといった目的がない人も参加しやすく、周りの人を巻き込むこともできる。

吉田 奈央 (昭和女子大学福祉社会学科)「伊那ワークキャンプ」

- ・ 4泊5日「伊那の谷・風の学校 ボランティアワークキャンプ」
- ・ 活動内容は、「高遠ぶらり」(フィールドワーク)、高遠城下祭り、民族芸能集団「田楽座」との交流などを通してまちについて考え、提案をする体験型ワークキャンプ
- ・ フィールドワークにより食と伝統について考えた。
- ・ ワークキャンプの体験は「知らない世界」「知らない私」が存在し、それを「知る」もの。新しい世界と新しい私を教えてくれるトビラのようなもの。
- ・ 行っただけ、知っただけになっていないか、という気持ちがある。多くの学びに対する気持ちを形にして、その地に返したい、恩返しをしたい。地域やそこの活動の魅力を発信できるように報告書をまとめるなど、次につながるワークキャンプを作って行きたい。
- ・ 本当に伊那は魅力的な場所。

加藤 結実 (昭和女子大学日本語に本文学科)「タイ・チェンライ風の学校」

- ・ 8月末の1週間
- ・ チェンライはタイ最北端メコン川を望むラオスとミャンマーの国境の町
- ・ 山岳少数民族(マイノリティ)の人々が偏見や差別と対抗する姿を知る
- ・ 児童養護施設には人身売買や臓器売買の被害から免れて保護された子ども達と出会う。
- ・ ワークキャンプの魅力として、全身でその土地に浸ることで癒されたと感じること、国際協力や支援ができること、自分の視野が広がること、である。
- ・ もっと魅力的なワークキャンプにするためには、もう少し長期間の滞在や、事前事後の交流を深めることが必要だと思う。
- ・ ワークキャンプの体験を通して、大学生活を前向きに積極的に行動できるようになった。

須貝 木之果 (武蔵大学経済学部) / 佐々木 勇蔵 (千葉大学教育学スポーツ科学課程) 「スリランカワークキャンプ (good! 主催)」

須貝木之果

- ・ good!のワークキャンプで2週間のスリランカワークキャンプに参加
- ・ スリランカは北海道位の面積でシンハラ語
- ・ スケジュールは道路建設などのワークが9時~16時と長く、夜は自分自身を考える時間になった。
- ・ 「ワークキャンプで見つけた新しい自分」それまでの自分は安全圏の中でうまくやれる

という自信があった、これ以上成長することも変化することも無いと思っていたが、キャンプの中の現実にはショックだった。周りの参加者と比べて、純粋に楽しめない自分がいて、もう一度参加することにしたが、2回目の参加で変化があった。挑戦してとりあえずやってみよう、安全圏から外に出て、なんでも苦手と決めずにやってみる、やってみることでやれることが広がり、見えてくることがあった。視野の広がりを感じた。

- ・ワークキャンプには「挑戦」がある。挑戦の有無がワークキャンプの濃さに関わる。自分を自分で決め付けないこと。ガチガチの価値観が柔らかなものになり、自分で新しい環境を作ることを実感した。

佐々木勇蔵

- ・高校までは部活動にも力を注ぎつつ、何事もうまくこなしてきたが、大学入学後何か急にほっぽり出されたような気持ちになったので、1年間は何となく遊ぶことにし、2年のとき、単位ほしさと何となく楽しそう、という動機でスリランカのワークキャンプに参加。
- ・スリランカの家の中での生活で、「家族」のあり方に心を奪われた。最後の日には涙が止まらなくなる、という体験になった。
- ・その時の心境は「心が動く」という感じ。初めて悩むことを知る。今までは自分の本当の思いを封印して、気づかないことにしていた。明るく振舞ってきたが、本当は孤独だったことに気づいた。人に頼ること、心を開くこと、人を好きになること、そんな心の動きを実感した体験だった。
- ・ワークキャンプとは「圧倒的な異世界」「非日常」「ワークの体験と語り合う場」であるので、心をゆさぶる体験になっている。
- ・学校生活やその他さまざまな場での自分の変化がある。まず、日常の中でも挑戦できるようになった。また、知らない世界に飛び出せるチャンスなので新しい世界を見ようとするようになった。ただ、今までの友人達との関係は変わっていないのが課題。
- ・社会人になったときに、ボランティアをどう継続するのか。
 - ⇒自分を見失うことがないように横の連携（同じ体験をした仲間）を継続したい。
 - ⇒自分が体験を通じて一人ひとりと向き合うことの大切さを知ったので、教師になって中高生にそのことを伝えたい

【セッションⅡ】「ワークキャンプに秘められた学びの構造」

パネリスト

興梠 寛 (昭和女子大学)

西尾 雄志 (近畿大学)

磯田 浩司(NPO 法人 good!)

コーディネーター

高島 弘行 (日本ボランティア学習協会)

興梠 寛 (昭和女子大学)

- ・日本のワークキャンプの歴史を紐解いていくと、1967年に始めてのワークキャンプを日本青年奉仕協会のプログラムで御殿場の青年の家で実施
- ・広島県呉市でも当時かぎっ子対策のワークキャンプが開催されている
- ・1950年代は社会開発、1960年代は国際交流、1970年代は青少年教育の時代として高校生のワークキャンプが始まり、1980年代になって国際協力のNGOの時代と変化してきており、現代的なニーズが反映されている。
- ・大学でのワークキャンプのプログラム作りの基本的な考え方として、社会課題とボランティア生活を組み合わせる。人とのつながり

具体的な事例

朝鮮半島の妻と高齢問題 (山口) / 奥会津の文化と民衆史研究 (三島)

自然と生きるアイヌの知恵(石狩町) / 韓国都市と農村の格差社会 (仁川)

タイ農村の貧困と社会開発 (コンケーン) / 都市のストリートチルドレン (ダッカ)

辺境のから中央を撃て (阿蘇蘇陽町) / 原発の町に生きる人々 (檜葉町)

東日本大震災と被災者の暮らし(女川) / 都市と農村を結ぶ絆 (伊那谷)

山岳少数民族の暮らしと文化 (チェンライ)

- ・アリヤラトネ (スリランカの社会活動家) の伝言
サルボダヤ・シュラマダーナ運動を提唱し、ガンジーのことばに従って「分かち合う」ことの大切さ、「目覚めた人は分かち合い、分かち合う人は目覚める」ということを社会活動として実践。ワークキャンプの考え方の基本でもあるが、若者たちの問題ではない。

西尾 雄志 (近畿大学)

- ・ワークキャンプの研究
- ・connotation (含意) と denotation (辞書的な意味) について述べた内田樹の文章の中に差別と connotation の関係がある。事実なのか、事実ではないものなのかを見極める。
- ・ワークキャンプは労働奉仕型キャンプであるが、そこで共同生活をするこ

人間関係が「あなた」と「わたし」という関係性から、**connotation** の変化が起こる。

- 中国でハンセン病の人の村で学生たちがワークキャンプを繰り返しているうちに、周囲の見る目に変化していく、まずは、子どもたちが来る、親たちの子どもたちを心配して見に来る、ハンセン病への理解が深まる、断ち切られていた人間関係を回復させる。最初は希望もなく早く死にたい、欲しいものもない、と言っていた村人が希望を持って長生きしたいというようになる。
- 公私の円環を駆動させる体験

磯田 浩司（NPO 法人 good!）

- 自分自身のワークキャンプでの体験をきっかけに、若者たちの活動を支援するための団体を立ち上げた。
- 自分自身も世界中をバックパックで旅をする生活をし、フィリピンのサンタクルーズ村での時間が自分自身の生き方に影響を与える体験になった。
- 普段「きつい」「だるい」「めんどくさい」「ムリ」としか言わない若者たちがワークキャンプに参加し、「やるしかない」状況に置かれ退路を断たれる、という体験をする。
- 若者たち自身が自分の課題に向き合う時間を持つ、それは、自己啓発セミナーとは異なり多くの社会課題と出会うことであり、多くの課題を持つ人々と出会うことである。個々人の変化はプライベートな問題であるが、若者たちの変化は社会の変化につながっていく、そして「社会が変わる」という実感を彼らが持つことを目指して、支援をしている。若者達には多くの社会課題に出会うことで、社会課題を知ることから始めてもらう。